

A c a n t h u s

第 8 6 号

平成 2 8 年 1 月 1 2 日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

H P http://www.sin-syu.jp/

振武特別攻撃隊長 3 ～第 81 振武特別攻撃隊出陣～

1945(昭和 20)年 3 月 11 日、第 6 練習飛行隊(東部 540 部隊)上田教育隊において、第 6 練習飛行隊の教官及び助教を隊員として、特別攻撃隊が編成され、片岡喜作中尉(中学 33 回)は隊長に任ぜられました。隊員は片岡隊長以下 12 名、いずれも操縦技術熟達の強者でしたが、特攻機は 250 キロ爆弾で爆装した 99 式高等練習機でした。隊員たちは原隊(熊谷航空隊)で特攻訓練を受け、出陣式後、山口県小月飛行場に進出、出撃命令を待っていました。(本紙では戦後 70 年の昨年から戦争に関わった先輩方の足跡を辿っています。)

見送り

1944(昭和 19)年に入り、戦局がますます厳しくなると、女学生達も勤労動員となり、奥(旧姓関口)純子さんたちも館林航空器材株式会社や太田市の中島飛行機の工場などで働くことになりました。翌 1945 年に入ると、空襲が激しくなり、太田はもちろん館林も空襲を受けるようになり、純子さんたちは毎日工場に出勤し、機銃弾などの製造に従事していましたが、4 月初旬「明朝、特攻隊員の見送りが館林駅で行われる。」との知らせが入りました。翌朝、勤労動員の出勤前に同級生たちと駅前に行くと、近所の人たちが集まっており、そこに片岡中尉の姿がありました。泉家で顔を合わせた時には、特攻で出撃することなど思いもよらないほど、温情に溢れた穏やかな様子でしたので、純子さんは「片岡中尉が行くんだ。」と驚きのあまり声が出ませんでしたが、見送りの方々への挨拶を終えると、片岡中尉は純子さんの前に来て、「勤労動員などつらい思いをさせてしまつて申し訳ない。命に代えて敵を滅ぼし、平和な時代を築き上げるから、もう少し我慢して下さい。」と頭を下げ、車中の人となりました。その優しいまなざしは、これから特攻で死に赴く人にはとても思えなかつたそうです。

また第 3 期特別操縦見習士官として、館林教育隊で片岡中尉から薫陶を受けた大野俊康氏(元靖国神社宮司・昭和 19 年 6 月 1 日、熊谷陸軍飛行学校へ入校)は、1993(平成 5)年 6 月に奥様の重子様から伺った話として「特攻隊長の命を受けた時、既に 4 歳と 3 歳の女の子がおり

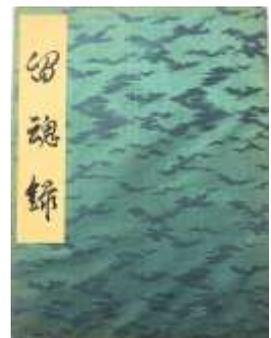
ました。そして私は身重で臨月になっていました。片岡は別れる時、『本当にいろいろよくやってくれた。私は思い遣すことはない。ただ、おなかの子供だけは気にかかると言っています(特攻魂のままに)』元靖国神社宮司大野俊康講演集・展転社)。

同期生との出会い

1945(昭和 20)年 4 月 7 日夜、片岡中尉は『留魂録』(靖国神社遊就館蔵)に特攻隊員 12 名の氏名・階級と「諸事完了 純一無難 訓練基地発前夜 片岡喜作」の語を記し、翌 4 月 8 日、熊谷飛行場を出陣。同日經由地の兵庫県加古川飛行場に到着しましたが、そこでは同期の鈴木武次良中尉との出会いがありました。鈴木中尉は中国戦線から帰国後、熊谷陸軍飛行学校付となり、伊那分教場教官を務めていましたが、第 6 航空軍隷下の通信司令部の飛行班長として福岡県板付飛行場に赴任するところでした。鈴木中尉はその時の様子を次のように記しています。

「大阪が敵の空襲に遭い、その後、偶然にも加古川飛行場で同期の片岡中尉の特攻隊の宿泊を知り、宿を訪ね激励する。驚いた事には隊員全員、伊那分教場時代の私の部下で編成されていた。牟田少尉の如きは、さつそく棋盤を持ち出し教育一石と…私は心して負けた。また松田曹長はお産 3 日目まで出て来たとか何と言つて来た?」「『遠い所に行つて来る。』と唯一言云つて来た」と涙ぐむ。(少年飛行兵)後輩の難波曹長は 1 日も早く突つ込みたい。どんな慰問をされても何馳走をされても、面白くも、うまくも何

ともない…と。」「陸軍少年飛行兵史」操縦 1 期生徒の歩み)



「留魂録」(靖国神社遊就館蔵・縦 23.3 cm 横 17.8 cm) 片岡中尉が特攻隊長に任命されてから小月基地出發までの間に、その決意や心境を記したためたもので、第 6 航空軍司令部や隊員たちの寄せ書きも記されています。出撃後に遺書とともに遺品として小月基地から重子夫人に届けられ、重子夫人は 1944(平成 6)年 7 月 14 日、これを靖国神社に奉納しました。

第 81 振武特別攻撃隊・留魂録

4 月 9 日、特攻隊の集結基地となっていた山口県小月飛行場(現海上自衛隊小月航空基地)に到着、4 月 12 日には菅原道大第 6 航空軍司令官より「第 81 振武隊」の命名を受けました。隊員は以下の 12 名でした。

- | | | |
|-----------|------|-----|
| 片岡喜作中尉(※) | 29 歳 | 茨城 |
| 牟田芳雄少尉 | 24 歳 | 佐賀 |
| 牛渡俊治少尉 | 22 歳 | 宮城 |
| 大場健治准尉 | 29 歳 | 宮城 |
| 松田富雄曹長 | 28 歳 | 宮城 |
| 難波隼人曹長 | 23 歳 | 岡山 |
| 仲本政好曹長 | 25 歳 | 鳥取 |
| 桐生 猛曹長 | 22 歳 | 静岡 |
| 橋本榮亮軍曹 | 21 歳 | 福井 |
| 白石哲夫軍曹 | 25 歳 | 大分 |
| 岡山勝己軍曹 | 24 歳 | 鹿児島 |
| 鍋田茂夫伍長 | 24 歳 | 神奈川 |
- 片岡隊長は同日付けの『留魂録』に、



片岡中尉が小月基地でお世話を受けた「員光下組婦人会」の方々に贈った書「神機到来す、必死を以て、人機命中、空母轟沈を期す」

「期団結振武隊 出撃ヲ前ニシ
隊長 片岡喜作 (昭三十一令
茨城県筑波郡大穂村字玉取

父 片岡鉄造
母 片岡しか
妻 片岡重子

と筆を下ろし、以下隊員11名それぞれの本籍地・年令・父母妻の名を書き連ね、最後に「大君の御為に散る 第八十一振武特攻隊一同」と揮毫、『留魂録』を結んでいます。

片岡隊長はこの『留魂録』を小月基地出撃に際し、遺品として重子夫人に送りましたが、その行間には、片岡隊長をはじめ隊員たちの「たとえ身は散華しようとも自分たちの魂は家族のもとに留まっている」との思いが溢れています。

心からのもてなし

小月基地待機中(4月9日〜20日)多忙を極めた片岡隊長でしたが、特攻基地知覧進出までの間、心洗われるような毎日が続きました。その一つが樫出勇(かいでいむ 1915年〜1994年)中尉との再会でした。樫出中尉は陸軍少年飛行学校同期生(1期生)で、同じ第1区隊に所属し、片岡隊長は第1班、樫出中尉は第2班でした。その後片岡隊長は偵察、樫出中尉は戦闘分科に進みました。さらに陸軍航空士官学校でも二人は少尉候補生21期学生として同期となりました。当時、樫出中尉は飛行第4戦隊に所属、小月基地で北九州上空の守りについており、二式複座戦闘機(愛称「屠龍」)を駆り、B29を22機撃墜し、「撃墜のエース」と呼ばれていました。航空士官学校卒業以来の再会を果たした二人は、飛行学校での思

い出、そして過ぎし日々の思い出の数々を語り合い、さらに祖国を思う互いの胸中を吐露して感無量、話が尽きるこ



小月基地で打合せ中の飛行第4戦隊の隊員たち。
機体は2式複座戦闘機「屠龍」

とはありませんでした。樫出中尉は戦後、その時の様子を「征きて帰らぬ出撃に一点のゆるぎもみせぬ片岡隊長の姿に、神を見る思いであった。」と述べています。

また小月基地での約10日間の待機中、第81振武隊の隊員たちは基地近くの王司温泉に宿泊していました。附近の村民は心からのもてなしを尽くしてくれました。そのもてなしを片岡中尉は奥様に宛てた遺書のなかで、「当山口県小月飛行場に於いて約10日間待機、附近の村民各位より誠心のもてなしを受け本当に幸福に征きます。その状況は宿舎附近に居られる豊島とし子様、桜井朝子様、西山の奥様より貴女にお知らせ下さる筈です。」と伝えていきます。

4月12日には下関市員光町(なみちまち)地区の婦人会(員光下組婦人会)会員が慰問に訪れました。その時の様子を同婦

人会会員であった松田セツさんは、1987(昭和62)年9月7日の朝日新聞下関版で「慰問した日、温泉近くの神社の境内で八分咲きの桜を一枝、片岡隊長に差し上げたところ、隊長は桜の枝を片手に持ち、吟詠しながらひと舞いされました。宿舎には20才前後の隊員が14〜15人いましたが、生きて帰れる望みもなく出撃していく若い隊員たちが気の毒で、何を話せばよいやら分かりませんでした。」と語っています(『特攻隊戦没者慰霊顕彰会会報第5号』より引用)。

この慰問に対して、隊長片岡中尉と副官大場健治准尉は漢詩と短歌の辞世の書を贈りました。この時贈られた書は、松田さんが41年間保管していましたが、元気なうちに遺族にお返ししたいと、朝日新聞下関支局に調査を依頼、その結果、遺族の所在が判明し、片岡中尉と大場准尉の遺族のもとに、それぞれ朝日新聞社を通じて届けられました(1987年9月17日の朝日新聞には「出撃前の辞世の書41年ぶり、遺族の手に」との記事が掲載されています)。

また同婦人会会員であった豊島とし子さんは、「ひとたび征けば二度と還らぬ必死必滅の特攻攻撃、婦女子の故に共には征けぬが、我が心は己が魂は相共に」との熱烈たる思いで、指を切り滴る鮮血を以て「祝出陣 祈成功 振武隊 山櫻萬歳! とし」と記した絹布のマフラ―を隊員一同に贈っています。(マフラ―の右下には片岡隊長が書いたと思われる「左記の乙女より隊員一同に贈らる 於基地 山口懸下関市王司区員 光町 豊島とし子」との添え書きがあり、出撃後片岡中尉の遺品として、重子夫人

のもとに届けられ、重子夫人が1994(平成6年)6月10日に靖国神社に奉納しています。)



血書のマフラ―
(靖国神社遊就館蔵)

村民から真心籠るもてなしを受けた隊員たちでしたが、ついに「出撃命令が下り、4月22日、知覧基地から沖繩へ出撃することになりました。片岡中尉は命令を受けると、郷里玉取に居る両親や奥様に「待望の時機来たりて 本日〇〇(機密保持のため特攻の2文字が伏せ字になつています)下命 愛機を操つて勇躍 制空の途につかんとす 兄と共に故郷の名を辱めざらん事を期す 委細後報 不備(文意が十分でない)という意で、手紙文の最後に添える語」との一報を送っています。(高21回 松井泰寿)

(※)片岡中尉の年齢について、本文中、29歳と31令の二つがありますが、これは片岡氏本人が当時一般的であった「数え年」で自らの年齢としたものと、戦後に年齢を言う際に現在の一般的な「満年齢」で表記したものが混在しているためです。片岡氏は1915(大正4)年6月生まれですが、数え年年齢では誕生と同時にすでに1歳で、正月を迎えるたびに年齢を1歳重ねますので、翌大正5年1月1日になれば2歳になります。満年齢では、大正5年1月1日では0歳(6か月)で、数え年とは2歳の差が出てしまいます。大正5年6月には1歳となり、その差は1歳です。ですから、1945(昭和20)年4月時点では、数え年で31歳、満年齢で29歳ということになります。